

【 議 事 録 】		作成
令和7年度 第4回 こども部会		井上
日時	令和7年12月17日（水） 10:00～	
場所	広陵町総合保健福祉会館（さわやかホール）	
出席者	吉田（葛城社協）、粕谷（高田社協）、江口（香芝社協）、小野・中川（しえ〜く）、家村・中井（葛城こ若）、河股（香芝市）、西口・越智（高田市）、原田（西和養護）、千葉（大淀養護）、玉井（香芝東中）、安部・泉尾（ほっとなび訪問看護）林・小細（愛の集い）、河内（どんぐり）、河崎・山藤・真島・井上（広陵町） ＊順不同・敬称略＊	
次第	内容	
会長あいさつ	第4回こども部会の次第説明と講師の紹介。	
内容	○研修会：心を支え、心を育み、学びを生み出す発達支援 ～生き生きとした遊びや活動の中で育つ力とは～ 講 師：関西発達臨床研究所 高橋浩先生 ＊先生のおたち、関西発達臨床研究所での活動紹介 ＊グループワーク →先生が関わった子の中から一例を提示。その子の特徴を聞いて、それぞれのグループで子どもが怒っている・泣いている理由を考える。 →怒る・泣く＝感覚等からの訴え。写真等からわかる範囲で想像される。 ＊色々な視点で考えることが大事。怒る・泣くに対応する、を繰り返すと癖になると言う考えもあるが、うまく対応してあげることが本人の安定に繋がる。 ＊追いかけてこを例に考えると、追いかけてこない理由は色々考えることができる。 それを追いかけられるように改善するためには、追いかけない理由をあらゆる視点から考えることが大切である。その際、思い込みと決めつけをしてはいけない。 ＊非認知能力（心の育ち）を高めることによって、自然と認知能力（学びの育ち）が伸びる。しかし、心の安定が不安定だと、認知能力があっても非認知能力を発揮することができない。現在はこの部分が不安定な子どもたちが多い。 ＊非認知能力は生涯に渡って発達する能力で、年配になっても楽しむことができる、積極的に挑戦する等、この力は豊かな人生を支えるため重要な能力である。＝心の安定に繋がる。 ＊心が不安定になると、行動面に現れる。それを修正しようとするような対応すると根本的に解決できていないため、自傷などの行動障がいが出てくる。安心できるように本人のすることを肯定すると、心が安定し満たされるため、意欲的になったり心に余裕が出てくる。 ＊心にダメージを受けると→子どもにエネルギーがあると、反発行動が起こる。エネルギーがないと社会から離れようとするため、ひきこもりやうつ病になる。 また、自身を過去に戻すことによって、自分を守ろうとする行動に出る。その際取る対応としては、本人を理解し行動に付き合ってあげること、本人の回復を待ち、それを乗り越える経験をさせるということも大事である。 ＊愛着形成のためには、その子の特性によって対応を変える必要がある。 そうすることによって、安心できると、外へ行動しようというようになる。 大人も同じであるが、心の支えとなるものがあることによって、前向きに取り組んでいくことができる。 ＊非認知能力の育ち →・自発的・主体的＝興味がある、意欲があるということ。 それが抑えられる要因を考え、改善へ取り組むことが必要。 ・一緒に遊んだり声をかけたり、関心をもって見守っていることを伝えることで、心の安心感を得る。 ・子どもを1人の人間として尊重することで、自己肯定感を高め、非認知能力が育つ。それが伸びると、その子が今度は他の人を大切にすることが育つようになる。 ・自分でやりたいという気持ちを大切に。過剰に手伝う・指導すると子ども自身の達成感が少なくなるため、自己肯定感の低下に繋がってしまう。＝自立に繋がらない。 ・自閉症の子の中には日本語がうまく頭に入らず、外国語から入ることがある。大きくなって周りの声が入ってきて、日本語も話せるようになってくるが、それは自身の能力を自分で育てる力があるということである。 ⇒一番大切なことは、その子の興味や意欲、やる気をどう引き出すか、である。 すでに興味のあるものなども利用し、本人のやりたいことをさせて意欲を育てることで、自信がつき自己肯定感が生まれる。 ＊訪問看護の分野で、家庭訪問することで不登校に対しアプローチするというのが、支援の方法の1つとして広がり始めている。 ＊遊びについて、やめさせようすると不安定になって不穏な行動が出る。遊びを提供する方法を工夫すれば、それを中心に興味の幅の広がりや他者との交流が生まれ、自然と能力を伸ばすことができる。	
次回	令和8年2月12日（木） 10:00～	